

5. 今月のトピックス「カンキツそうか病について」

◆被害の様子と本病の特徴◆

本病はカンキツ類の重要病害のひとつで、葉や若枝、果実に発生します(写真 1、2)。

葉や果実では、若くて組織が柔らかい間に感染すると、突出した「いぼ型病斑」になります。一方、組織が硬くなった後や枝に感染した場合は、かさぶた状の「そうか型病斑」になります(写真 1)。



写真 1. 葉の病徴(左:いぼ型病斑、右:そうか型病斑)

葉では萌芽直後から感染、発病しますが、ほぼ生長が止まる6月上旬以降は発病しなくなります。ただし、夏秋梢は組織が柔らかいので発病し、翌年の重要な伝染源となります。果実では、落花直後から8月下旬頃まで発病します。

カンキツの種類によって感受性が異なり(表)、温州みかんやレモンなどは発病しやすい種類です。

◆発生しやすい条件と近年の状況◆

病原菌は葉や枝の病斑内で越冬し、伝染源となります。胞子は雨水によって伝搬



写真 2. 果実の病徴

表. 各種カンキツのそうか病に対する感受性

感受性	カンキツ種
高い	温州みかん、レモン、晚白柚等
中程度	セミノール、ユズ、三宝柑等
低い	甘夏、ネーブル、不知火、ポンカン等

し、高湿度が感染好適条件なので、降雨が続くと発生が多くなります。また、柔らかい組織ほど感染しやすいので、日照不足や窒素肥料過多などにより、生育が軟弱になると発病しやすくなります。

薬剤による防除効果が高く、近年では一般圃場での発生は

少ない状況です。しかし、十分な防除ができないと発生する場合があります、農業研究所紀南果樹研究室の無防除圃場では、本年は多発傾向となっています(図)。

◆防除のポイントと注意事項◆

- 1) 薬剤防除: 防除適期は4月上中旬(発芽期)、5月中下旬(開花後期)及び6月中下旬(幼果期)です。特に4月上中旬の防除が重要です。発生が認められる圃場では、来春の防除を徹底してください。
- 2) 伝染源の除去: 病斑がある葉や枝を除去します。特に、病斑が認められる夏秋梢は重要な伝染源なので、できるだけ剪除してください。
- 3) 栽培管理: 窒素質肥料の多用を避けて、軟弱な生育をさせないようにしましょう。また、風通しや陽当たりを良くして、圃場内の湿度低下を図ってください。

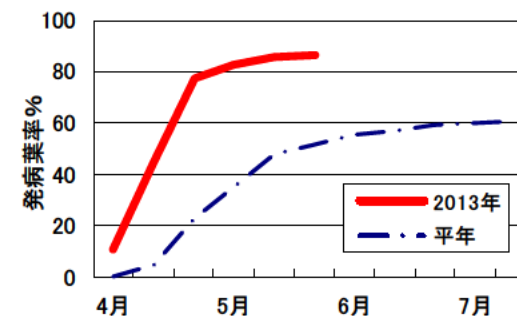


図. 紀南果樹研究室におけるカンキツそうか病発病葉率の推移
温州みかん(興津早生、無防除)、100葉調査。
平年は過去10年(2003~2012年)の平均値。